



#12

美作麗子の●●における異常な愛情

著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

大貫哲也（18歳）は考えていた。

（少年漫画は少年向けの漫画で、少女漫画は少女向けの漫画のことなのに、美少女漫画はどうして美少女向けじゃなくて大きいお友達向けの漫画なんだろう……）

自分でもくだらないことを考えているのは判っている。判っているが、考えずにはいられなかった。

こんな極限の状況から少しでも意識を逸らすためには、そんなくだらないことを考えるよりほかに一体どうしたらいいのだろうか。

「哲也くん、もっと感情入れて！ 誘うように淫らな表情で！ こう！ こうよ！」

「はい……」

「もっと足ひらいて！ でも右足はちょっと曲げて床につけて！ そう！ そうよ！」

「はい……」

スケッチブックを持って哲也の前に立つのは美作麗子だ。

哲也は今、麗子の言うがままのポーズをとらされている。

……しかもかなり恥ずかしいポーズをだ！

麗子は二階堂剛太郎というペンネームで、少年マガジンに「ハット・トリック・イレブン」という超人気サッカー漫画の連載を持つ売れっ子漫画家だ。

「ハット・トリック・イレブン」——通称ハトイレ——はテレビシリーズ2期を経て、今夏劇

場映画化されることが決まっている。全世界での動画配信も決まり、まさに今が旬という作品だった。

そして、哲也はそんな人気漫画家のアシスタント募集に応募し、高い競争率を勝ち抜いてその座をゲットした、言わば選ばれし者のはずだった。

はずだったのに……。

「違うの、哲也くん！ もっとおねだりするような、小悪魔の表情を出して！ 違う！ そうじゃないの！ もう！ あたしを見て！ こうよ、こうよ！」

「はい……」

むふーむふーと鼻息も荒く指示を飛ばす麗子。

黙っていれば国民的美少女もかくやという美貌を誇る彼女の口から、なぜこんなにも残念な言動が次から次へと飛び出すのか。

それは麗子が——人気美少女漫画家・椿麗次郎でもあるからだ！

つまり麗子は本人が「美少女」であり、かつ「美少女漫画」を描いているという大変希有な存在なのである！

「先生、そろそろハトイレの作画に戻ったほうが良くないですか？」

このデッサンルームの隣の作画室えがらむらではチーフアシの足立あだちさんの指揮しんの許もと、来週分のハトイレの原稿制作が着々と進められている。

「いーの！ ハトイレは半年先までネーム出来てるし、今週分のキャラのペン入れは済んだからよゆうなの、よゆうー！ それよりあたしはこの『おとあさ』に賭かけてるのよ！ あたし史上初のBL漫画なんだから！ あたし、この漫画でBLの新境地を拓ひらくのよ！ つまりあたしと哲也くんはニューフロンティアなのよ！ ニューフロンティア世界のアダムとイブなのよ！」

言葉の意味は判らないが、とにかくすごい自信だ。

実際のところ、新連載の「おとあさ」——「男同士の朝がくる」——に麗子が賭かけているのはよく判る。なにしろ目が真剣すぎて怖い。これはあれだ。獲物えものを狙ねらう野獣やじゅうの目だ。

哲也が股を開いたまま物欲ぶつよくしそうにしているポーズが、麗子の持つ鉛筆によって、淫靡いんびに、卑猥ひわいに、流麗りゅうれいに、スケッチブックに定着ちやうちやくされていく。

ああ、あれが来月号の薔薇薔薇裸族ばらばらばらぞくに載ののか——。

そう考えると哲也は絶望的な気持ちになってきた。

だいたい俺はこんなことをするために東京までやってきたのだろうか……。

もともと麗子が美少女漫画家として活躍しているところに、少年マガジンの編集が目をつけてハトイレの連載を始めたという経緯けいゐがあるから、麗子としてはこちらの方が本業という意識の方が強いのだろう。つまり収入の大小ではなく、矜持きやうじの問題なのである。

それにしたって……。

「まあ1点入れるまで半年ぐらい引き延ばすなんてふつーだからね、ふつー！ そう考えるとサッカー漫画なんてちよるいもんよね！」

うわあ、言っちゃったよ。

ファンには絶対聞かせられない言葉だな……。

……というか俺も大ファンだったから聞きたくなかったよ……。

ハトイレに燃えたこの2年間を返して欲しい……。

二階堂先生のアシスタントになって、先生からの熱いソウルを受け継いで、自分もハトイレのような漫画史に残る傑作けつさくを描かくんだ！

……そう思っていた時期が私にもありました……。

まず二階堂先生が女性——しかも少女——だということに驚おどろき、それから自分好みの顔だったからモデル用のアシに採用されたと知ったときの虚無感きよむかんを、誰か理解してくれる人がこの世にいるだろうか。いや、いない（反語）。

「もー、どうにも本気が感じられないのよねー、哲也くんからは！」

「はあ……」

麗子は突然スケッチブックをフローリングの床に叩たたきつけると、腕組みをしてぷりぷりと怒り出した。

……あの、腕組みされるとただでさえ大きい胸が強調されてものすごい目の毒なんですけど……。

「哲也くん、もしかしてBL漫画……いいえ、エロ漫画のことなめてない!？」

「え?」

先生こそサッカー漫画のことなめてんじゃないですか!? という言葉を哲也はすんでのところ
で飲み込んだ。

「考えてごらんなさい。この世の中からエロが、そう、性欲がなくなったら! どうなると思
う!? 人類の少子高齢化はますます進み、絶滅するしかなくなるのよ! エロがあるからこそ
人類は繁栄するのよ! そう、エロこそ人間の欲求の根元! 究極なのよ! それをあたしは
極めつくしたいのよ! 芸術だと思わない!? ロックだと思わない!」

BLでは少子高齢化は防げない……というか、むしろそれを助長しませんか? という言葉
も哲也はすんでのところで飲み込んだ。

なにしろ目がマジで反論を許さない雰囲気だからな。……逆らったらきつと殺される……物
理的にも、社会的にも。

「……判ったわ!」

「え?」

麗子がぼんと手を打った。

「哲也くん、相手がいないから本気になれないんでしょう?」

「いや、そういうことじゃなくてもっと根本的な問題が……わああっ!」

突然麗子が哲也に覆い被さってきた。豊かな胸が哲也の目の前でぶるんぶるんと揺れている。
「ほら、あたしが相手の男役をやってあげるから……存分によがりなさい!」

「無理! 無理ですから! 120パー無理ですから!」

そもそもこんな美少女を男として見られるわけがないし、もう、おっぱいとか太股とか吐息
とか甘い匂いとか、いろんなところから総合的に攻撃されてるんですけど! 理性の限界の向
こうが見え隠れしてるんですけど!

「そ、そもそも、僕がモデルする意味って何かあるんですか!? テッサン人形とか、今だっ
たらヴァーチャルモデルのPCソフトとかいろいろあるじゃないですか!? それこそPOSER
とかQUIMAとか!」

「むっ……」

麗子はさも心外そうに眉をしかめた。

「やれやれ……今の若い子はすぐそうやって三次元から二次元に逃避しようとする……嘆かわ
しいことだわ……!」

あんだだって十分若いでしょうが! っていうか、俺と同じ年だって担当さんから聞いた
よ! あと漫画つめてめっちゃ二次元商売じゃないすか! という言葉の数々を哲也はすんでの

ところで飲み込んだ。もう今日は言葉を飲み込みすぎてお腹いっぱいだ。

「哲也くんは絵に描いた餅を食べられるのかしら？」

「はい？」

「どんなに精巧せいこうに描いたところで、絵の餅はしよせん絵の餅よ。食べられはしないわ。そうだしよっ？」

「そうですね……」

ふ……つと麗子はニヒルな笑みを浮かべた。

「つまり、そういうことよ！」

「意味わかんないっす！」

なんか思いつきり説明省はないたくせにドヤ顔してるこの大先生を誰かどうにかして！

「確かに一休いっしゅうさんなら屏風びょうぶに描いた虎とらを追い出せるかもしれないわ！ でもあたしにはそんなイリュージョンはできない！ だからモデルは三次元に限るのよ！」

「もう超理論すぎて意味フッフ！」

「じゃあ、判ってもらったところで続き行くわよ」

「やだこの人全然俺の話聞いてない！」

またもや覆ひい被かさつてきた麗子を、哲也はなんとか押しのけようとするが、とにかくおっぱいとかおっぱいとかおっぱいとか、こちらから接触不能の部分が多すぎてどうすることもでき

ない。というか視界の80%がおっぱいってどういう状況！

ああ、もう誰か助けてくれー！

「きやー!!」

突然、麗子でも哲也でもない第三者の絹きぬを裂くような叫び声こゑが響ひびき渡わたった。

見るといつの間にか開いたドアの向こうに青ざめた表情でわななく少女の姿があった。

茜川翠あかねがわみどり。

哲也と同じ時期に採用されたアシスタントの娘だった。奇遇にも哲也と同じ大学に通っているらしい。

背中まで伸びた艶つややかな黒髪は驚愕きょうわくに震ふるえ、その桜色さくらいろの唇は言葉にならない言葉を紡紡いでいる。

ガシャーン……

やがて翠は震える手で持っていたお盆から、紅茶の入ったティーカップを盛大に落として床にぶちまけた。よほどショックだったのだろう。

「な、なんてことを……」

最悪だああー！

この状況……どう見ても俺と先生が●●●してるようにしか見えないじゃん！
 「ち、違うんだ、西川さん！ こ、これは先生が、その、デッサンの勉強のためにあのその」
 「なんて……」
 震える指を唇に当てて、翠はよろよろと後ずさる。
 終わった……俺の社会的生命は今、抹殺された……。あとはもう、せめて自首させてくださ
 い……。

「なんてうらやましいことしてるんですか、先生！ ぜひあたしも混ぜてくださいーい！」

ええええええええ！

なんで!?

「ふ。さすがね、翠さん。それでこそ『おとあさ』のチーフアシスタントとして貴女を雇った
 甲斐があるというものだよ」

え!? 西川さんってハトイレじゃなくてこっちの漫画の人だったの!?

「わかりました、先生！ じゃあ遠慮なく……うふふふふ……じゆるるる……」

「うわっやめっ……何をするんで……わああああ!？」
 哲也の絶叫がデッサンルームに響き渡る。

もちろん、助ける者は誰もいない。

なにしろ部屋には野獣と化した女が二人いるだけなのだから……。

おしまい